

研 究

1歳6か月児をもつ父親の育児行動に関係する
要因の検討

～6つの育児行動に着目して～

北原 綾¹⁾, 杉本 昌子²⁾, 林 知里³⁾, 横山 美江⁴⁾

〔論文要旨〕

父親の育児ニーズが高いとされる1歳6か月児をもつ父親の育児行動の実態と、それらの関係要因を明らかにすることを目的とした。無記名自記式質問紙を郵送し、回答を得た329人（有効回答率29.2%）を分析対象者とした。育児行動は、「あやす」、「遊び相手」、「おむつ交換」、「お風呂」、「食事の世話」、「寝かしつけ」とした。6つの育児行動は、通勤時間を含めた労働時間が「12時間未満の者」が「12時間以上の者」に比べて有意に週3回以上行っていた。「食事の世話」は、「育児休業の取得者もしくは取得希望者」、「有給休暇をとりやすい者」の方がそうでない者に比べて週3回以上行っており、「おむつ交換」は「平等的性役割分業意識である者」が「伝統的性役割分業意識」に比べて、「育児講座や相談の利用がある者」が「利用なしの者」に比べて有意に週3回以上行っていた。

Key words：父親，育児行動，1歳6か月児

I. 緒 言

近年、わが国では、核家族化、少子化、女性の活躍推進により、育児環境が大きく変化する中、男性も主体的に子育てや家事を行う必要性が高まっている。国においては、2007年にワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）憲章の制定や、2009年に育児・介護休業法の改正を行い、男性も子育てしやすい社会や父親の育児休業取得が促進されている。しかしながら、時間があれば今以上に育児参加したいと思う父親は約7割である¹⁾ことや約3割の男性が育児休業取得を希望している²⁾ものの男性の育児休業取得率は、2.03%³⁾にとどまっており、父親の育児参加への意欲と実際の行動にはギャップが生じている。

父親の育児参加に関する先行研究は、主として、父

親の育児参加が母親や子ども、父親自身へもたらす影響^{4~7)}、父親の育児参加の規定要因^{8~10)}、父親の育児状況の3つのテーマに分類される¹¹⁾。父親の育児状況に関しては、父親が主体的に行いやすい育児行動は、比較的手間と時間がかからないものが多く¹²⁾、日常的で基本的な育児行動は母親中心で、父親はあくまで補助的なものである¹³⁾との報告がある。さらに、平日に夫が食事の世話やおむつ交換を行っている場合は妻の満足度が高く¹⁴⁾、父親自身も平日の育児時間が長いほど自己評価が高い¹⁵⁾ことが報告されている。

一方、これまでの研究報告では、父親の具体的な育児行動に着目し、関係する要因を検討したものは未だ見当たらない。育児行動により実施率が異なる点を考慮すると、それぞれの育児行動に関係する要因を明らかにすることは、父親の育児参加を促進する支援策を

Factors Associated with Childcare Activities of Fathers with Children Aged One and a Half Years

[2667]

Aya KITAHARA, Masako SUGIMOTO, Chisato HAYASHI, Yoshie YOKOYAMA

受付 14. 9. 8

1) 西宮市こども支援局子育て事業部保育所事業課（保健師）

採用 15. 7.16

2) 大阪市立大学大学院看護学研究科公衆衛生看護学研究室（大学院生）

3) 大阪市立大学大学院看護学研究科公衆衛生看護学研究室（准教授）

4) 大阪市立大学大学院看護学研究科公衆衛生看護学研究室（教授）

別刷請求先：北原 綾 西宮市こども支援局子育て事業部保育所事業課 〒662-8567 兵庫県西宮市六湛寺町10番3号

Tel：0798-35-3054 Fax：0798-22-9107

検討するうえで重要であると考ええる。

ところで、2歳未満の子どもをもつ父親を対象とした研究では、身辺の世話等の育児ニーズが高く、母親の育児ストレスが最も高くなる時期であり、父親に日常的な世話行動が求められている¹⁶⁾ことが示されている。そこで、本研究では、1歳6か月児をもつ父親を対象とし、その育児行動の実態とそれぞれの育児行動に関係する要因を明らかにすることにより、父親に対する育児支援のあり方を検討する基礎資料とすることを目的とした。

II. 方 法

1. 調査期間と対象者

本研究で対象としたA市は、阪神間に位置する住宅地域である。対象者は、2012年7～9月の1歳6か月児健康診査対象児の父親とし、健診案内文と共に無記名自記式質問紙を郵送し、返信用封筒にて回答を得た。対象児数は1,126人で、対象児の父親331人から回答が得られ（回収率は29.4%）、多胎児をもつ父親を除く329人を分析対象者とした。

2. 調査内容

父親の育児行動の項目は、国立社会保障・人口問題研究所の第4回全国家庭動向調査¹⁷⁾を参考に、「あやす」、「遊び相手」、「おむつ交換」、「お風呂」、「食事の世話」、「寝かしつけ」の6項目とした。各項目に対する回答は、実際に育児をした回数として問い、5段階評定（週5回以上、週3～4回、週1～2回、月1～3回、全くしない）にて把握した。本研究では、「週3～4回～週5回以上」を「週3回以上」、「全くしない～週1～2回」を「週3回未満」とする2値変数とした。

調査項目は、父親に関するものとして、「年齢、健康状態、職業、就労形態、通勤時間を含めた労働時間、有給休暇のとりやすさ、育児休業取得状況、育児経験、出産準備教室の参加、育児講座や相談利用、他の父親とのネットワークや情報交換の機会、性役割分業意識」とし、その他「妻の年齢、妻の就労（フルタイム、パート、育児休業中を含む）、家族形態、児の性別と出生順位」とした。通勤時間を含めた労働時間は、本研究結果の平均値を参考に「12時間未満」と「12時間以上」の2値変数とした。有給休暇のとりやすさは、4段階で把握した後、「比較的とりやすい・とりやすい（以下、

とりやすい）」と「比較的とりにくい・とりにくい（以下、とりにくい）」の2値変数とした。育児休業取得については、「取得したことがあるおよび取得したいけれどもできなかった（以下、育児休業取得者もしくは取得希望者）」と、「取得しようと思わなかったし取得しなかった（以下、取得なしかつ取得希望なしの者）」とする2値変数とした。また、先行研究¹⁸⁾を参考に、「男性は仕事、女性は育児をすべきだと思いますか（以下、性役割分業意識）」を4段階評定で把握し、「非常にそう思う・まあまあそう思う」を「伝統的性役割分業意識」、「全くそう思わない・あまりそう思わない」を「平等的性役割分業意識」とする2値変数とした。

3. 分析方法

統計学的分析については、質的変数の独立性の検定には χ^2 検定、平均値の差の検定にはt検定を使用した。それぞれの育児行動に関係する要因を明らかにするために、各育児行動を従属変数とし、各行動で有意な関係がみられた変数（有意水準5%未満）を独立変数としたモデルを作成し、強制投入法によるロジスティック回帰分析を行った。また、父親の年齢を調整するために、年齢を連続変数で投入した。統計学的解析には、SPSSver.18.0 for Windows 統計パッケージを使用した。

4. 倫理的配慮

倫理的配慮として、A市保健所長、担当課長、ならびに対象者に依頼文書で趣旨説明を行い、対象者の自由意思での回答であること、調査への協力は調査票の回答をもって同意とみなすこと、調査結果は無記名で返送し、個人が特定されないことを明記した。なお、本研究は、大阪市立大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した。

III. 結 果

1. 対象者の概要および育児行動の実態

表1に示すように、父親の年齢は、平均35.3±5.5歳、正社員である父親は、91.6%、通勤時間を含めた労働時間は、平均12時間24分±2時間であった。核家族世帯の父親は313人（95.4%）、共働き世帯の父親は97人（30.3%）であった。

表2は父親の育児行動の実態を示している。週3回以上している育児行動は、「あやす」が217人（67.2%）、

表 1 対象者の概要

		N (%)
年齢 (歳)	<30	49 (14.9)
	30~39	212 (64.4)
	40≦	68 (20.7)
	Mean ± SD (Range)	35.3±5.5 (22~52)
健康状態	まあまあよい~とてもよい	232 (70.5)
	よくない~ふつう	97 (29.5)
性役割分業意識	伝統的	154 (47.4)
	平等的	171 (52.6)
育児経験	あり	148 (45.3)
	なし	179 (54.7)
出産準備教室の参加	あり	160 (48.9)
	なし	167 (51.1)
育児講座や相談の利用	あり	30 (9.2)
	なし	294 (89.8)
他の父親とのネットワー	あり	116 (35.5)
クや情報交換の機会	なし	207 (63.3)
職業	会社員・公務員等	283 (88.2)
	自営業・その他	38 (11.8)
就労形態	正社員	294 (91.6)
	非常勤・アルバイト等	27 (8.4)
通勤時間を含めた労働時間	12時間以上	220 (70.5)
	12時間未満	92 (29.5)
	Mean ± SD (Range)	12時間24分±2時間0分 (6~17時間)
有給休暇のとりやすさ	とりやすい	208 (65.6)
	とりにくい	109 (34.4)
育児休業取得	取得者もしくは取得希望者	104 (33.3)
	取得なしかつ取得希望なしの者	208 (66.7)
妻の年齢 (歳)	<30	65 (19.9)
	30~39	230 (70.3)
	40≦	32 (9.8)
	Mean ± SD (Range)	33.6±4.6 (21~44)
妻の就労	あり	97 (30.3)
(フルタイム、パート、なし)		223 (69.7)
育児休業中を含む)		
家族形態	核家族	313 (95.4)
	拡大家族	15 (4.6)
児の性別	男児	182 (55.5)
	女児	146 (44.5)
児の出生順位	第 1 子	176 (53.7)
	第 2 子以降	152 (46.3)

無回答は表から除外した。

表 2 父親の育児行動の実態

(n=329)

	週 3 回以上 n (%)	週 3 回未満 n (%)	p-value
あやす	217 (67.2)	106 (32.8)	p<0.001
遊び相手	217 (66.4)	110 (33.6)	p<0.001
おむつ交換	169 (51.5)	159 (48.5)	n.s
お風呂	156 (47.7)	171 (52.3)	n.s
食事の世話	129 (39.6)	197 (60.4)	p<0.001
寝かしつけ	77 (23.6)	249 (76.4)	p<0.001

検定結果はχ²検定による。無回答は表から除外した。

2. 父親の育児行動と関係する要因

表 3 に父親の育児行動と関係する要因を示す。まず、6 つの育児行動すべての週 3 回以上の実施は、「通勤時間を含めた労働時間」が「12時間未満」の方が「12時間以上」に比べて有意 ($p < 0.05$) に多く、「妻の就労なし」に比べて「妻の就労あり」の方が有意 ($p < 0.05$) に多かった。次に、それらの要因以外で各育児行動の週 3 回以上の実施と有意に関係した要因は、「あやす」は、「健康状態がよい」、「平等的性役割分業意識」であり、「遊び相手」は、「健康状態がよい」、「有給休暇がとりやすい」であった。「おむつ交換」は、「育児講座や相談の利用あり」、「平等的性役割分業意識」、「育児休業取得者もしくは取得希望者」、「児が第 1 子」であった。「お風呂」と「食事の世話」は、「平等的性役割分業意識」、「育児休業取得者もしくは取得希望者」、「有給休暇がとりやすい」であった。「寝かしつけ」は、「平等的性役割分業意識」、「育児休業取得者もしくは取得希望者」、「児が男児」であった。なお、各育児行動に有意な関係がなかった要因は、職業、就労形態、家族形態、育児経験、出産準備教室の参加の有無、他の父親とのネットワークや情報交換の機会の有無であった。

3. 父親の育児行動と関係する要因の分析結果

表 4 に、各育児行動に関係する要因をロジスティック回帰分析した結果を示す。なお、各変数間の相関係数はいずれも 0.4 以下であった。6 つの育児行動すべてにおいて、通勤時間を含めた労働時間が 12 時間以上の者を基準にすると、12 時間未満の者は有意に週 3 回以上行っており、「あやす」がオッズ比 3.5 (95% CI: 1.81~6.66, $p < 0.001$)、「遊び相手」がオッズ比 6.1 (95% CI: 2.86~12.88, $p < 0.001$)、「おむつ交換」がオッズ比 1.9 (95% CI: 1.11~3.29, $p < 0.05$)、「お風呂」がオッ

「遊び相手」が 217 人 (66.4%)、「おむつ交換」が 169 人 (51.5%)、「お風呂」が 156 人 (47.7%)、「食事の世話」が 129 人 (39.6%)、「寝かしつけ」が 77 人 (23.6%) であった。さらに、「あやす」と「遊び相手」の実施は、「週 3 回以上」が「週 3 回未満」に対して有意 ($p < 0.001$) に多かったが、「食事の世話」と「寝かしつけ」の実施は、「週 3 回未満」が「週 3 回以上」に対して有意 ($p < 0.001$) に多かった。

(n = 329)

表3 父親の育児行動と関係する要因

	あやす		遊び相手		おむつ交換		お風呂		食事の世話		寝かしつけ	
	週3回以上	週3回未満	週3回以上	週3回未満	週3回以上	週3回未満	週3回以上	週3回未満	週3回以上	週3回未満	週3回以上	週3回未満
父親の年齢												
Mean ± SD	35.0±5.5	35.8±5.5	35.4±5.7	35.1±5.1	35.5±5.4	35.0±5.7	35.1±5.9	35.4±5.1	35.0±5.7	35.5±5.3	35.0±6.3	35.4±5.3
父親の健康状態												
まあまあよい〜とてもよい	161 (70.6)	67 (29.4)	162 (69.8)	70 (30.2)	125 (53.9)	107 (46.1)	112 (48.5)	119 (51.5)	94 (40.7)	137 (59.3)	56 (24.2)	175 (75.8)
ふつう〜よくない	56 (58.9)	39 (41.1)	55 (57.9)	40 (42.1)	44 (45.8)	52 (54.2)	44 (45.8)	52 (54.2)	35 (36.8)	60 (63.2)	21 (22.1)	74 (77.9)
育児講座や相談の利用												
あり	19 (61.3)	12 (38.7)	19 (61.3)	12 (38.7)	22 (71.0)	9 (29.0)	16 (51.6)	15 (48.4)	12 (38.7)	19 (61.3)	10 (32.3)	21 (67.7)
なし	196 (67.8)	93 (32.2)	196 (66.9)	97 (33.1)	144 (49.0)	150 (51.0)	139 (47.4)	154 (52.6)	115 (39.4)	177 (60.6)	65 (22.3)	227 (77.7)
役割割り業意識												
伝統的	93 (61.6)	58 (38.4)	96 (62.3)	58 (37.7)	63 (40.9)	91 (59.1)	61 (39.6)	93 (60.4)	46 (30.3)	106 (69.7)	27 (17.6)	126 (82.4)
平等的	121 (72.0)	47 (28.0)	118 (69.8)	51 (30.2)	102 (60.0)	68 (40.0)	94 (55.6)	75 (44.4)	81 (47.6)	89 (52.4)	48 (28.4)	121 (71.6)
通勤時間を含めた労働時間												
12時間以上	128 (59.8)	86 (40.2)	123 (56.2)	96 (43.8)	97 (44.3)	122 (55.7)	81 (37.0)	138 (63.0)	65 (30.0)	152 (70.0)	36 (16.5)	182 (83.5)
12時間未満	77 (83.7)	15 (16.3)	81 (89.0)	10 (11.0)	57 (62.0)	35 (38.0)	65 (70.7)	27 (29.3)	53 (57.6)	39 (42.4)	34 (37.4)	57 (62.6)
有給休暇のとりやすさ												
とりやすい〜比較的とりやすい	143 (70.1)	61 (29.9)	148 (71.8)	58 (28.2)	111 (53.6)	96 (46.4)	109 (52.7)	98 (47.3)	94 (45.6)	112 (54.4)	49 (23.8)	157 (76.2)
とりにくい〜比較的とりにくい	66 (61.1)	42 (38.9)	60 (55.0)	49 (45.0)	49 (45.0)	60 (55.0)	42 (38.5)	67 (61.5)	30 (27.8)	78 (72.2)	22 (20.4)	86 (79.6)
育児休業取得												
取得者もしくは取得希望者	71 (69.6)	31 (30.4)	71 (69.6)	31 (30.4)	64 (62.1)	39 (37.9)	62 (60.2)	41 (39.8)	53 (52.0)	49 (48.0)	32 (31.4)	70 (68.6)
取得しなかつ取得希望なしの者	139 (67.8)	66 (32.2)	134 (64.4)	74 (35.6)	96 (46.2)	112 (53.8)	89 (42.8)	119 (57.2)	70 (33.8)	137 (66.2)	39 (18.8)	168 (81.2)
母親の就労（フルタイム、パート、育児休業中を含む）												
あり	74 (77.1)	22 (22.9)	72 (75.0)	24 (25.0)	61 (62.9)	36 (37.1)	60 (61.9)	37 (38.1)	51 (53.7)	44 (46.3)	35 (36.5)	61 (63.5)
なし	137 (62.8)	81 (37.2)	140 (63.1)	82 (36.9)	103 (46.4)	119 (53.6)	92 (41.6)	129 (58.4)	75 (33.8)	147 (66.2)	41 (18.6)	180 (81.4)
対象児の性別												
男児	122 (67.4)	59 (32.6)	120 (66.3)	61 (33.7)	95 (52.5)	86 (47.5)	86 (47.8)	94 (52.2)	71 (39.2)	110 (60.8)	55 (30.6)	125 (69.4)
女児	94 (66.7)	47 (33.3)	96 (66.2)	49 (33.8)	74 (50.7)	72 (49.3)	70 (47.9)	76 (52.1)	58 (40.3)	86 (59.7)	22 (15.2)	123 (84.8)
出生順位												
第1子	124 (71.3)	50 (28.7)	122 (69.7)	53 (30.3)	104 (59.1)	72 (40.9)	89 (50.9)	86 (49.1)	74 (42.5)	100 (57.5)	45 (25.7)	130 (74.3)
第2子以降	92 (62.2)	56 (37.8)	94 (62.3)	57 (37.7)	65 (43.0)	86 (57.0)	67 (44.4)	84 (55.6)	55 (36.4)	96 (63.6)	32 (21.3)	118 (78.7)
家族形態												
核家族	206 (66.9)	102 (33.1)	207 (66.6)	104 (33.4)	163 (52.2)	149 (47.8)	150 (48.2)	161 (51.8)	123 (39.5)	188 (60.5)	74 (23.9)	236 (76.1)
拡大家族	10 (71.4)	4 (28.6)	9 (60.0)	6 (40.0)	6 (40.0)	9 (60.0)	6 (40.0)	9 (60.0)	6 (42.9)	8 (57.1)	3 (20.0)	12 (80.0)

検定結果はχ²検定による。無回答は表から除外した。

表4 父親の育児行動と関係する要因の分析結果（ロジスティック回帰分析による）

あやす				遊び相手			
要因	オッズ比	95% 信頼区間	p-value	要因	オッズ比	95% 信頼区間	p-value
通勤時間を含めた労働時間				通勤時間を含めた労働時間			
12時間以上	1.00			12時間以上	1.00		
12時間未満	3.48	1.81～6.66	$p<0.001$	12時間未満	6.06	2.86～12.88	$p<0.001$
				有給休暇			
				とりにくい	1.00		
				とりやすい	1.75	1.02～2.99	$p<0.05$
おむつ交換				お風呂			
要因	オッズ比	95% 信頼区間	p-value	要因	オッズ比	95% 信頼区間	p-value
通勤時間を含めた労働時間				通勤時間を含めた労働時間			
12時間以上	1.00			12時間以上	1.00		
12時間未満	1.91	1.11～3.29	$p<0.05$	12時間未満	3.70	2.10～6.53	$p<0.001$
性役割分業意識				母親の就労			
伝統的	1.00			なし	1.00		
平等的	1.95	1.17～3.24	$p<0.05$	あり	1.97	1.13～3.46	$p<0.05$
育児講座や相談利用							
なし	1.00						
あり	2.62	1.07～6.39	$p<0.05$				
出生順位							
第2子以降	1.00						
第1子	1.81	1.08～3.03	$p<0.05$				
父親の年齢（連続値）							
	1.05	1.00～1.11	$p<0.05$				
食事の世話				寝かしつけ			
要因	オッズ比	95% 信頼区間	p-value	要因	オッズ比	95% 信頼区間	p-value
通勤時間を含めた労働時間				通勤時間を含めた労働時間			
12時間以上	1.00			12時間以上	1.00		
12時間未満	2.82	1.62～4.90	$p<0.001$	12時間未満	3.05	1.66～5.61	$p<0.001$
育児休業				母親の就労			
取得なしかつ取得希望なしの者	1.00			なし	1.00		
取得者もしくは取得希望者	2.02	1.17～3.49	$p<0.05$	あり	2.03	1.09～3.75	$p<0.05$
有給休暇				兄の性別			
とりにくい	1.00			女児	1.00		
とりやすい	2.05	1.16～3.63	$p<0.05$	男児	2.09	1.11～3.92	$p<0.05$

「あやす」：独立変数は、父親の健康状態、性役割分業意識、母親の就労（フルタイム、パート、育児休業中を含む）の有無、通勤時間を含めた労働時間を投入した。

「遊び相手」：独立変数は、父親の健康状態、母親の就労（フルタイム、パート、育児休業中を含む）の有無、有給休暇のとりやすさの有無、通勤時間を含めた労働時間を投入した。

「おむつ交換」：独立変数は、育児講座や相談利用の有無、性役割分業意識、出生順位、母親の就労（フルタイム、パート、育児休業中を含む）の有無、育児休業取得者もしくは取得希望者と取得なしかつ取得希望なしの者、通勤時間を含めた労働時間を投入した。

「お風呂」：独立変数は、性役割分業意識、母親の就労（フルタイム、パート、育児休業中を含む）の有無、有給休暇のとりやすさの有無、育児休業取得者もしくは取得希望者と取得なしかつ取得希望なしの者、通勤時間を含めた労働時間を投入した。

「食事の世話」：独立変数は、性役割分業意識、母親の就労（フルタイム、パート、育児休業中を含む）の有無、有給休暇のとりやすさの有無、育児休業取得者もしくは取得希望者と取得なしかつ取得希望なしの者、通勤時間を含めた労働時間を投入した。

「寝かしつけ」：独立変数は、対象児の性別、性役割分業意識、母親の就労（フルタイム、パート、育児休業中を含む）の有無、育児休業取得者もしくは取得希望者と取得なしかつ取得希望なしの者、通勤時間を含めた労働時間を投入した。

上記の分析について、父親の年齢を連続変数で投入して調整を行った。また、有意差の認められなかった要因は表から除外した。

ズ比3.7 (95% CI: 2.10~6.53, $p < 0.001$), 「食事の世話」がオッズ比2.8 (95% CI: 1.62~4.90, $p < 0.001$), 「寝かしつけ」がオッズ比3.1 (95% CI: 1.66~5.61, $p < 0.001$) であった。

通勤時間を含めた労働時間のほか、有意差のある要因を各育児行動の週3回未満に対する週3回以上の実施の比を見ると、「遊び相手」は、「有給休暇をとりやすい」と回答した父親が「有給休暇をとりにくい」と回答した父親と比べて、オッズ比1.8 (95% CI: 1.02~2.99, $p < 0.05$) であった。「おむつ交換」は、「平等的性役割分業意識」を持つ父親が「伝統的性役割分業意識」を持つ父親に比べて、オッズ比2.0 (95% CI: 1.17~3.24, $p < 0.05$), 「育児講座や相談利用あり」と回答した父親が「利用なし」と回答した父親と比べて、オッズ比2.6 (95% CI: 1.07~6.39, $p < 0.05$), 「第1子」の父親が「第2子以降」の父親に比べて、オッズ比1.8 (95% CI: 1.08~3.03, $p < 0.05$) であった。「お風呂」は、「妻の就労あり」と回答した父親が「就労なし」と回答した父親に比べて、オッズ比2.0 (95% CI: 1.13~3.46, $p < 0.05$) であった。「食事の世話」は、父親が「育児休業取得者もしくは取得希望者」であることが、「取得なしかつ取得希望なしの者」であることに比べて、オッズ比2.0 (95% CI: 1.17~3.49, $p < 0.05$), 「有給休暇をとりやすい」と回答した父親が「有給休暇をとりにくい」と回答した父親に比べて、オッズ比2.1 (95% CI: 1.16~3.63, $p < 0.05$) であった。「寝かしつけ」は、「妻の就労あり」と回答した父親が「就労なし」と回答した父親に比べて、オッズ比2.0 (95% CI: 1.09~3.75, $p < 0.05$), 対象児が「男児」をもつ父親が「女児」をもつ父親に比べてオッズ比2.1 (95% CI: 1.11~3.92, $p < 0.05$) であった。

IV. 考 察

対象者の家族形態は、6つの育児行動において有意な関係はなかったことから、核家族であることと父親の育児行動は関係しないと考え、すべての父親を分析対象とした。

本研究は、横断的調査であるため、父親の育児行動と関係する要因との因果関係について論じることができないが、6つのすべての育児行動を、「通勤時間を含めた労働時間」が12時間未満である方が12時間以上に比べて有意に週3回以上行っていた。先行研究^{10,15,19)}と同様に、日常的な父親の育児行動を促す

ためには就労以外の時間の保証が重要であると考えられる。

「遊び相手」と「食事の世話」は有給休暇をとりやすい者の方が有意に週3回以上行っていたことから、有給休暇がとりやすい職場制度や父親の育児参加を認め合う雰囲気であることや、父親自身が子どもの就寝前に帰宅し、共に食事や遊びの時間を積極的に作っているとも推察される。さらに、「食事の世話」は、育児休業取得者もしくは取得希望者の方が有意に週3回以上していたことから、育児休業取得により子どもに合わせた食事のスキルを獲得していることや、育児休業取得を希望する父親の育児参加意欲の高さが実際の行動に反映しているとも推察される。今後は、父親の育児参加を促進する企業の取り組みや父親の仕事・家庭への比重と、育児行動との関係も明らかにすることが必要であろう。

一方、先行研究²⁰⁾と同様に、子どもの世話の中でも不快感を伴うとされる「おむつ交換」は、平等的性役割分業意識を持つ父親の方が有意に週3回以上行っていた。先行研究より平等的性役割分業意識を持つ父親の方が、育児家事实施意欲が高い²¹⁾と示されている。また、おむつ交換は育児講座や相談を利用したことがある者の方が有意に週3回以上行っており、育児の学習会に参加した父親は育児分担していることの報告²²⁾もあることから、育児への参加意欲の高さが、週3回以上おむつ交換を行うことに影響していると考えられる。今後、子育て支援の一環として、子どもとのふれあいが楽しいと感じるような親子遊びの場や、夫婦でわが子の成長発達、仕事と家庭・育児への価値観を共有できるよう場を設定することも必要であろう。加えて、おむつ交換は、児が第1子である方が有意に週3回以上行っていたことから、第1子誕生により父親役割意識が高まったことが影響しているとも推察される。

「お風呂」と「寝かしつけ」は、共働き世帯の父親の方が有意に週3回以上行っていたことから、夫婦が仕事から帰宅した後は、妻が食事の準備や後片付けをして、父親がお風呂に入れたり寝かしつけたりするなど役割分担をしていることが推察される。「寝かしつけ」は、児が男児である方が週3回以上有意に行っていたが、先行研究においても子どもの性別と父親の育児行動に関する報告は数少ないことから、さらに調査検討が必要であろう。

本研究の限界として、回収率は29.4%と低く、回答者は、母集団の中でも育児に関心が高い集団に偏っている可能性がある。また、実際の労働時間と育児行動との関係を明らかにすることはできなかった。

V. 結 語

本研究結果より、6つの父親の育児行動のすべてにおいて、通勤時間を含めた労働時間に有意差が認められたことから、週3回以上の父親の育児行動を推進するためには、長時間労働の是正や、社会経済状況を含めた多様な価値観を認め合う職場環境への取り組みの充実と同時に、ワーク・ライフ・バランスに関する意識啓発を男女問わず子どもから幅広い年代層に向けて一層強化していくことが必要である。さらに、出産前に、夫婦が互いのキャリアプランや将来の目標を語り合う機会を設定し、家事・育児の負担を共有する必要性に気づき、父親になる男性に主体的に育児に関わろうという意識を高める取り組みも必要であろう。

本研究の一部は、文部科学省科学研究費補助金（課題番号：26671042）の助成を受けて実施した。

本研究における利益相反は存在しない。

文 献

- 1) 柳原真知子. 父親の育児参加の実態. 天使大学紀要 2007; 7: 47-56.
- 2) 厚生労働省. 今後の仕事と家庭の両立支援に関する調査. 2008.5. (<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/05/h0520-1.html>, 2013.11.2.)
- 3) 厚生労働省. 平成25年度雇用均等基本調査. 2014.6 (<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/71-25.html>, 2014.7.27.)
- 4) 山口(久野)孝子, 堀田法子. 6か月児をもつ母親の精神状態に関する研究(第2報)一性役割と精神状態との関連から一. 小児保健研究 2005; 64(1): 11-17.
- 5) 三上知美, 掛谷益子. 母親の育児ストレスと父親の育児参加に関する研究. インターナショナル Nursing Care Research 2011; 10(1): 75-83.
- 6) 尾形和男, 宮下一博. 父親の協力的関わりと母親のストレス, 子どもの社会性発達および父親の成長. 家族心理学研究 1999; 13(2): 87-102.
- 7) 柏木恵子, 若松素子. 「親となる」ことによる人格発達 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究 1994; 5(1): 72-83.
- 8) 石井クンツ昌子. 父親の役割と子育て参加—その現状と規定要因, 家族への影響について. 季刊家計経済研究 2009; 81: 16-23.
- 9) 尹 靖水, 朴 志先, 近藤理恵, 他. 父親の育児参加の促進・阻害要因に関連する仮説の実証的検討. 評論・社会科学 2011; 94: 15-26.
- 10) NICHD Early Child Care Research Network. Factors Associated With Fathers' Caregiving Activities and Sensitivity With Young Children. Journal of Family Psychology 2000; 14(2): 200-219.
- 11) 深川周平, 佐伯和子. ワーク・ライフ・バランスにおける父親の育児参加に関する研究の動向. 北海道公衆衛生学雑誌 2011; 25(2): 45-52.
- 12) 五十嵐久人, 飯島純夫. 父親の育児参加への意識と育児行動. 山梨医科大学紀要 2001; 18: 89-93.
- 13) 梶原佳子, 松原由美. 父親の育児行動について (1). 九州保健福祉大学研究紀要 2007; 8: 89-94.
- 14) 野島正寛, 太田真之, 大橋一慶, 他. 北海道における父親の育児参加の実態—夫の育児参加行動に対する妻の満足度を指標とした検討—, 北海道公衆衛生学雑誌 2010; 24(2): 99-103.
- 15) 岡本絹子. 1歳6か月児をもつ父親の父親としての自己評価と生活状況. 吉備国際大学保健科学部研究紀要 2005; 10: 29-36.
- 16) 藤原千恵子, 日隈ふみ子, 石井京子. 父親の育児家事行動に関する縦断的研究. 小児保健研究 1997; 56(6): 794-800.
- 17) 国立社会保障・人口問題研究所. 第4回全国家庭動向調査. 2008.7. (http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/nsfj4/NSFJ4_gaiyo.pdf, 2013.11.2.)
- 18) 本村 汎, 上原あゆみ. 幼稚園児の母親を対象とした育児不安の研究. 厚生指標 2006; 53(13): 1-7.
- 19) 御手洗由佳. 育児における男性の家事・育児参加の推移と特徴 男性の家事・育児参加の二極化. 日本女子大学大学院紀要 2012; 18: 171-178.
- 20) 中嶋由加里, 井上千加, 神保由香, 他. 父親の性役割平等意識と不快感を生じやすい育児行動との関連 1歳6か月児の父親へのアンケート調査より. 福岡県立看護専門学校看護研究論文集 2002; 25: 153-161.
- 21) 塩澤真由美, 石田貞代, 萩原結花. 出産後早期にお

ける父親の育児家事実施意欲に関する研究. 母性衛生 2007 ; 47 (4) : 582-589.

- 22) 秋山輔美, 板倉美子, 江口桂子, 他. 父親の育児に関する学習と効果. 助産婦雑誌 1997 ; 51 (11) : 82-87.

[Summary]

Objectives : The purpose of this survey was to study the frequency and proportion of six childcare activities performed by fathers with a child aged one and a half years.

Methods : The survey was mailed to the study participants. The six childcare activities surveyed were "Dandling", "Playing", "Changing diapers", "Bathing the child", "Helping with eating" and "Putting the child to sleep".

Results : The sample comprised 1,126 fathers, each with a child aged one and a half years. Of these, the data obtained from 329 fathers, excluding two fathers of twins, were analyzed. "The six childcare activities"

were significantly undertook three or more times per week in the working hours including commute time of the fewer than twelve hours. "Helping with eating" were significantly undertook three or more times per week in the actual or desired childcare leave and the tendency to take paid leave from work. "Changing diapers" were significantly undertook three or more times per week in the egalitarian attitudes toward gender roles and the parenting course taken by the participants or consultation regarding childcare issues.

Conclusion : This study revealed a significant association between working hours including commute time and fathers' participation in the six childcare activities surveyed. This indicates the importance of the working conditions conducive to the fathers' childcare activities the raising awareness of work-life balance.

[Key words]

father, childcare, child aged one and a half years